

黄表紙の中の神仏

Deities and Buddhas from among the KIBYOUSHI

村上 奈帆

Nao Murakami

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード : 黄表紙, 異界, 神仏

Key words : KIBYOUSHI, Another world, Deities and Buddhas

1. 研究目的

黄表紙とは、草双紙を戯作化したものである。体裁は子ども向けの絵本である草双紙のまま、当世風俗を大人向けに描いたもので、「茶化す」「滑稽」を主とし、庶民の文学として人気となった（棚橋正博『黄表紙の研究』若草書房 平成九年）。

黄表紙は画と本文が一体で、画は本文を理解するための補助としての役割ではなく文以上に多くの情報量を与えられており、不可欠なものであった。画は黄表紙の人気に大きく関係し、山東京伝の『心学早染艸（しんがくはやぞめくさ）』（寛政二年）に登場する「天帝」「善魂」「悪魂」というキャラクターは当時人気となり、その人気から続編となる黄表紙が刊行されたほどである（棚橋正博『山東京伝の黄表紙を読む：江戸の経済と社会風俗』ペリカン社 平成二十四年）。

本研究では、江戸後期の黄表紙に登場する神仏、とりわけ天帝に与えられた役割や行動の傾向を分析し、特徴を考察していきたい。

〈異類〉についての研究は近年化物（ばけもの）の研究が盛んであるが、神仏、中でも天帝についての研究は多く見受けられない。そこで、天帝がいつ黄表紙に登場し、どのような形でほかの黄表紙に登場し「天帝もの」の趣向が受け継がれていたのか、なぜ多くの黄表紙に登場したのかを明らかにすることで、黄表紙研究に新たな視点を加えることが期待できると考える。

2. 研究実施内容

天帝が登場する天明期から寛政期の黄表紙をリストアップし、天帝が

- ・どのような姿なのか
- ・何を使役しているのか

・どのような役割を持っているのか

この三つのポイントに絞ってまとめた。また、リストアップした黄表紙を翻刻・注釈を見ながら（黄表紙は翻刻されているものが多いが、その場合は新たに翻刻し注釈をつけた）共通して使われている単語や言い回しを確認した。

リストアップした十五タイトルの黄表紙は以下のとおりである。

- ①山東京伝『天慶和句文（てんけいわくもん）』天明四年
- ②朋誠堂喜三二『天道大福帳（てんとうだいふくちょう）』天明六年
- ③山東京伝『張かへし行儀有良礼（はいかへしぎやうぎあられ）』寛政二年
- ④山東京伝『大極上請合売 心学早染艸（だいくじやううり しんがくはやぞめくさ）』寛政二年
- ⑤山東京伝『世上洒落見絵図（よのなかしゃれけんのえず）』寛政三年
- ⑥山東京伝『堪忍袋緒メ善玉（かんにんぶくろおじめのぜんだま）』寛政五年
- ⑦山東京伝『のしの書初若井の水引 先開梅赤本（のしのかきぞめ わかみのみづひき まづひらくむめのあかぼん）』寛政五年
- ⑧式亭三馬『天道浮世出星操（てんとううきよのでづかひ）』寛政六年
- ⑨曲亭馬琴『昔怪談諷教訓 心学晦莊子（むかしむかしのくわいだんなぞなぞのけうくん しんがくみそかさうじ）』寛政七年
- ⑩唐来参和『善悪邪正大勘定（ぜんあくじやしやうおほかんぢやう）』寛政七年

- ⑪十返舎一九『雷門再興 御膳浅草法 (かみなりさいこう ごぜんあさくさのり)』寛政八年
- ⑫曲亭馬琴『加古川本蔵綱目 (かこがわほんさうこうもく)』寛政九年
- ⑬十返舎一九『雨宮風宮 出儘略縁起 (あめのみやかぜのみや でほうだいらやくゑんぎ)』寛政十年
- ⑭曲亭馬琴『風見艸婦女節用 (かざみくさをんなせつよう)』寛政十一年
- ⑮曲亭馬琴『彼岸桜勝花談義 (ひがんざくらはなよりだんぎ)』寛政十一年

黄表紙に天帝(天道)が初めて登場したのは

①『天慶和句文』であった。日食が起きる理由を、天道が体調を崩し肘掛に寄りかかっているから日に影が掛かる、というような理由付けをして天変は天上界でのトラブルが原因だとするものである。ここでは「天道」=「太陽」として描写され、姿は光背のある中華風の男性として描かれている(以下人間型天帝とする)。

②『天道大福帳』では、頭が後光そのものに置き換えられた束帯姿に描かれていた(以下後光型天帝とする)。ここでも「天道」=「太陽」として描かれているが、③『心学早染艸』では「万物創造の神」として描かれ、後の黄表紙において「太陽(天道)」として描かれた天帝と、「万物創造の神」として描かれた天帝の二つのパターンに分かれていた。

研究対象とした十五タイトルの黄表紙では、人間型の天帝が登場するものが六つ、後光型の天帝が登場するものが八つあった(姿が描かれないものが一つあった)。

小人やほかの神、カラス等に人々の生活を監視させていたり、問題が起きた際の調査のために使役している天帝は全体のなかで九つあった。

使役されているキャラクターとしてはとりわけ

カラスと星が多い。これは「天帝」=「太陽」として捉え、カラスは太陽の化身または使神とされるためだと考えた。また星は、手下の北斗七星を使って人々の行動を監視しているという星辰信仰の万物創造の神である北極星として天帝を描いているのだと考える。そのほか様々な手下を使役している天帝は、作中において自ら主人公に働きかけることは少なく、その手下たちを使って問題を解決することが多かった。そして問題が解決したら「人間」のことは最終的に許してしまう、主人公ら登場人物たちが「天道人を殺さずとはこのことか」とありがたがる結末、所謂「めでたしめでたし」で終わるのである。

3. まとめと今後の課題

研究対象として取り上げた天明期から寛政期に刊行された十五タイトルの黄表紙では、天帝は二種類の姿で描かれ、多くの黄表紙で手下を使っていた。

寛政の改革によって流行した心学に則り、「理屈くさい」ものを嫌い、何事も茶化すことを主としてきた黄表紙が教訓的な内容へと変化していった中で、天帝は人々に教訓を授けるものやすべての道理を管理するものとしての役割を持ち、とりわけ「心学もの」と呼ばれる黄表紙に登場していた。これは心学において、人の心は天から来ると考えられていたから、というのが理由のひとつであると考えている。

今後の課題としては、さらに注釈作業を進めて理解を深め、当時の宗教信仰や教化運動と合わせてなぜ黄表紙に天帝が登場していったのかを考えていきたい。

4. この助成による発表論文等

なし